

方言助詞集(終助詞篇)

—九州—

鎌田良二(編)

本稿は『甲南国文 第二六号・第二七号・第二九号・第三〇

号』所載の「方言助詞集(格助詞・接統助詞・副助詞篇)——

近畿・(中国)・四国——」・「方言助詞集(終助詞篇)——近

畿・四国——」・「方言助詞集(格助詞篇)——九州——」・「方言

助詞集(接統助詞・副助詞篇)——九州——」に続くものである。

前回にも記したように、九州の方言研究は九州方言学会をはじめ非常に進んでいるのでその研究書も多く私どもには目を通すことのできない書が多いが、今回は次の書からとった。今回の資料とその略号を記す。

『方言学講座 第四卷』(東京堂)——略号(コ)

『九州方言の基礎的研究』(九州方言学会・風間書房)——

(九)

『九州のことは』(吉野義雄・双文社)——(九コ)

『日本方言の記述的研究』(国立国語研究所・明治書院)——

(日記)

『九州方言語法考序説 上巻』(北条忠雄・自家版)——

(九方)

『福岡県地域方言の研究』(都築頼助・自家版)——(フチ)

『福岡県内方言集』(福岡県教育委員会、国書刊行会)——

(福方)

『長崎方言集』(本山桂川、国書刊行会)——(長方)

『対馬南部方言集』(滝山政太郎・中央公論社)——(ツ)

『大分県方言の研究』(三ヶ尻浩・明文堂)——(大分)

「肥後の方言」(秋山正次・桜楓社) —— (ヒゴ)

「熊本方言の研究」(原田考起・日本談義社) —— (ク)

「大隅肝属方言集」(野村伝四・中央公論社) —— (大隅)

右の略号は各記述の末尾に記したものである。

本稿は終助詞について記すものであるが今回の資料の記述から関連する他の類に属する助詞が入ることもある。

以下、標準語形を示し、各地のそれに相当する語形を記したが、方言助詞の性質上、必ずしも標準語形と一致しないものもある。特に終助詞は微妙なニュアンスをもっていて、これを標準語形のどれにあてるかが困難なものがある。その点であるいは誤りがあるかもしれない。ご叱正を乞う次第である。

本稿の記述として全体的にととのえるため資料の原文の記し方から変えたものも多いことをお断りする。

終助詞

福岡

〔総括〕

疑問形 式で相 違・呼 懸・動 感・調	軽い	求 意	断 定	感 嘆	指示	勸 説	命 令
か	け	ぞ	の	かしら	よ	いろ	い
①カー ②ヤ ③ノモ ④カンモ・カモ	①バイ・バン・パノ	②タイ・テー		③ザイ	よ ろ え	いろ れ	い
「行くカー・それヤ・あなつあんカンモ・そうノモ」の様に①のカーは豊前地域に行われ、②のヤは、福岡市付近に使われ、③ノモは久留米地方に用いられ、④カンモ・カン・カモは柳川近傍に頻用される。使用度の高い助詞である。	様々な意味を表わすもので「バイ」は軽い疑問を含んで居り、「タイ」は軽い断定を含むが、ともに相手に同意を求め、話者の感動がこめられている。①のバイは博多では、ベイ・テイの様な流りを生じ、朝倉郡では「ヘンザイ」の様にザイとなり、筑後西南部では「バナ・パノ・タン」等と同系統の「バン・タン・カン」等を生んでいる。②のタイも筑後ではテイ・テーとなり、非常に特異性を発揮している。	動詞の命令形につく「よ・ろ・い」等を接尾語と見るか、活用の一部とするか、終助詞と見るか、諸説のあるところである。					

熊本・熊本方言に現われる文末の助詞を、意味の差、地域や階層の差と関係なく、列挙してその結合の通則を見る。

- ① タイ・ター・タウ・ダイ (連濁により変化)
- ② バイ・バン・パウ・ポー・バナ・バイタ
- ③ クサイ・クサ
- ④ ナイ・ナ・ナウ・ナータ・ノイ・ノモイ・ネ
- ⑤ ガ・ガナ・ガイタ
- ⑥ カ・カウ・カイト・コー
- ⑦ ヤ・
- ⑧ ゴ・ザイ

この中で①は語根に分解すると、「タ」と下に膠着して部分となるが、この残りの部分は「ヨ」を語原とする間投助詞である。②の中でバナの語末部は④のナと同じである、②のバイタの語末「タ」は、人代名詞対称の「アータ」が膠着したものである。④の「ノモイ」は、「ノマイ」の変化したもので、語末の「モイ」の語原は代名詞対称の「オマエ」である。そこで①から⑧まで語根に分析して、二つ結合する時に来る

ものと下に来るものとに分類すると、

- A 上に来るもの、タ・バ・クサ・ガ・ヤ
 B 下に来るもの、(ヨ)系₁イ・ウ・ン等。ナ系₂ナ・ノ・ネ。代名詞系₃(ア)タ・(オ)モイ

Bの下にAが来ることはありえない。Bの中で互に結合する時は、ナ系、ヨ系、代名詞どれも上にも下にもなり得る。文法的機能の上からも、Aは述格を構成して文を結ぶことを役目とし、Bは文表現の上に主観的色彩を加える事が主な役目となっている。Aには陳述性が中心をなして居り、Bは主体的な表現を中心とするとも言えるが、この説明は陳述性と文体性とかいう用語の定義からしてかからねばならないから、ここではAとBとの二類にその様に表現的機能の差が認められるという事実だけを認めていただきたい。

- 1、アリヤ学校タイ
- 2、アリヤ学校パイ
- 3、アリヤ学校クサイ
- 4、アリヤ学校ジャガ

文法上のいわゆる断定である。指定の助動詞で表現する所を、肥筑方言は右の1、2、3のように終助詞で表現するのである。これは起原的には「アレハ学校」で、用言のないまゝで文表現

を完結したもので、そこに表現の空白がある。この空白が「タイ」等がそこに入りこんでその陳述性を吸収したのとも考えられよう。

断定のしかたの上で、1より2の方が情意的に強く、問手にその判断を推しつけようとする語気があり、3の「クサイ」は語原「こそ」の意味が残っている。

文末の助詞は、どの場合にも、話者の情意表現に関係している。

5、ヨシタモンタイナ

6、母ハハさん、取られたばな（こゑたえず）

7、今戻つたばん（ク）

8、そんなつばかり云うとらいたですばん（肥後民話集）

6は郷土の作家森本忠氏の小説「こゑたえず」の会話、「取られたばな」はいかにも肥後の表現である。これは徴兵検査合格の報告である。7、8の「バン」は珍しいが、大休城南方言で熊本市より南方である。筑前の柳河方言など北九州に代表される方言だが、これは音相の微妙な差だから、「タイ」「バイ」で代表される地域にも、「タウ」「パウ」があり、「タン」「バン」も出て来る。そんな場合、「タウ」はや、荒つほく、「タン」はもつと乱暴である。阿蘇地方でもそのような状態を視察するこ

とが出来る。

9、こぎやん死んだふりしつともどぎやんきつかかな（肥後民話集）

「カナ」は合体して、疑問と情意的な訴えを含んでいる。「ナ」はともかく相手に呼びかけるのである。自分を相手の中に入れようとする。「ヨ」は呼ぶことばだが、それは相手を自分の方呼びよせるのである。その語感方言でよく生きていようである。

10、お前と化けくらべばして見うかない（全）

この表現では「見うか」と「ない」とが一寸離れている。

「カ」で一度完結して「ナイ」が更に添加されている。

11、よか養子だろかいた。（肥後にわか）

12、あーたが男のあがるこつだけん、（銭わ）おどんが出そ
うばいた。（全）

この助詞の語末に「アーク」が融化していることは既に言ったが、それは文表現を敬語化しているのである。文末助詞による待遇表現の一例である。だがこの表現が今日の熊本市方言では田舎言葉と感じている人が多い。これにとつて変わったのは、「デスカイ」「デスバイ」である。恐らく標準語から新しく借入れられたものであろうが、「デス」を「カイ」「バイ」と結合

した文表現が、新しい方言となった。方言が標準語になったのではなくて、方言が新しい要素を入れて新しくなったのである。

更に野性的な表現は、「コー」「ポー」の類。

13、驚くらえ、一人渡世が出来るこう(肥後狂句)

「一人渡世」は独立自力で生活すること。「きさまに、独り立ちの生活ができるのか」と罵倒したもの、

14、俺もたい、ぬしも落第したつこ(企)

小学校の同級生の述懐話か。だから表現が野性的である。この「コー」「ポー」は現在ほむしろ男の児童の中に用いられている。「何スルコー」「ナンコー」「クラスルポー」ほとんどけんくわの用語になっているかの趣がある。

吉町義雄氏から、「チコウ」「チコ」という助詞が使われているかと聞かれたことがある。

15、ヌシガナンチコ

といったら、「何というか」「何らゆうのか」とやはり喧嘩ことばである。

16、オリヤ知ランゾ

17、打タルルサイ

この「ゾ」系助詞も、熊本方言の中では劣勢ではない。これは女性が使えば、しとやかでないと感じられているようである

が、女性でもなか／＼勇敢に使う人があるのは事実である。それでも右の意識があればこの「ゾ」表現は男性的としてよいわけである。

室町期の表現では、「ゾ」は疑問表現と強調表現とを有するが熊本方言では疑問表現はなくなっている。

見來って熊本方言、広く言えば肥後方言の文形式の上に最も色こく投影しているのは、室町時代の京都地方の口語である。

室町時代既に京畿方言と対立した姿を示していた語法要素も、その中に相当に残存している事も、ほぼ紹介する事ができたかと思う。(ク)

〔か〕

福岡・疑問・詠嘆・カ・ヤ

標準国語における終助詞としての「か」は疑問の「か」である。しかし、詠嘆と疑問は交流するから終助詞の「か」は詠嘆の「か」と二つであってその実ほもとは一つのものである。ともに体言の下につくが、動詞なら連体形につく、この「か」が地方によってさまざまに代替せられる。福岡市地方では「ヤ」が多く、柳川地方では「カモ」となり久留米地方では「ノモ」となる。最も頻度数の多い助詞だけにその分布は今後多いに吟

味する必要がある。(フチ)

福岡・ノウ(久)(井)、ロウ(久)(井)、「カ」の意にて問う詞の末に加うノウは同輩以上の者に対して用い、ロウは下輩に向つて用う、例えば、アナタ角力見ニイッタノウ。オマヤードケイッタロウ(汝は何処に行きたるかという意)などの如し。

(福方)

長崎・(対馬)

ダ、「か」の意。女子の友人間に行なわれる疑問詞。「来んダ」——来ませんか。「いたダ」——行きましたか。「行かんダ」——行きませんか。「いたとダ」——行ったのですか。「いやダ」——いやですか。(ツ)

長崎・へ・へー

① デスカの意、意外の事。ソーへ、イタトへ、ドケへ、ナンシニへ (そうですか、行ったのですか、どこに?、何しに?)

② 他に呼かけ、または問うて。ヨカノーへー(いいねえ、え?) ナンへー(何んですか)

③ 要求または願望。ナンカへー ヨカロがへー(何か下さいいいでしょう)(長方)

佐賀・長崎・「ノー」は「ね」に相当するもので、「ニャー」

「ノマイ」「ナタ」などに变化する。詠嘆、疑問などに用いる。ヨカノマイ(いいですね、いいですか)(コ)

佐賀・長崎・疑問の「カイ」は「ヤー」と併用され、「カン」「カント」などに変わる。「キヤ」「コー」「ケー」を用いる地方もある。ヨカヤ、ヨカカングなど。(コ)

佐賀・(北山)・カ・カイ

ドースッ カ(カイ) どうするの。

「カ・カイ」はこのような問いかけを基本とし、他に、疑い、依頼、勧誘などの表現をもしたてる。なお、当、方言では、この「カイ」が「キヤ」と転訛することもある。

ナン シウヤツ キヤ。何をしてくか。

北山東部地区には「コー」 \wedge 「カイ」もある。(九)

佐賀・(北山)・ト

ヤダー ナイ ショット。おまえは何をしているの。

ドキャン シタト。どうしたの。

いわゆる準体助詞「ト」の、転じて成つたものである。例文のように、疑問の表現に立ちやすい。(九)

佐賀・(北山)・ヤ。ムカシント ヤ(昔のか)。このような問いかけの機能に立つ「ヤ」が見られるが、使用頻度は低い。

(九)

熊本・ネ・ナ(疑問の「か」「の」にあたる)。A行クネ(ナ)、行カンネ(ナ)——行くか、行かないか、行くの?、行かないの?、B勉強バ為ルトネ、為ントネ——勉強をするの?、しないの?、トネのトは準体助詞。C早才行カンネ

(ナ)——早く行きよ!

ネ(ナ)は共通語と同じ用法もあるが、右の例(Cはすこしちがう)は疑問助詞カ・ノに対応する用法であって、共通語ネにはない共通語ネと形が同じであるだけに共通語化には困難な助詞である。(コ)

熊本・(深海)

チャル語尾形容動詞やコビユラ句に、語尾を除くこともなく、終助詞「カ」が添加されることがあるが、このばあいの「カ」は疑問の意味を示さないし、上りイントネーションを併同することもない。これらは終助詞「カ」の派生的な別な用法の系列に属している。

1、チーサンナ タツシヤジャッカ。(じいさんは達者じゃないか!)

2、ヒデコワ ガクシエイジャッカ。(秀子は学生じゃないか!)

一方、同じような事態で、チャ語尾の形をとる形容動詞やコ

ビユラ句に、語尾を除くこともなく、「カ」が添えられる表現が得られることがある。しかし、この種の「カ」は上述の終助詞「カ」の派生的なものと解するには、意味的に、あまりにもかけ離れているので、同列には扱えない。

1、ジーサンナ タツシヤジャッカ。(じいさんは達者じゃない。)

2、ヒデコワ ガクシエイジャッカ。(秀子は学生じゃない。)
(注)この種の「カ」は形容詞ナカの略形と見ておく。

カイは、しばしば、ka:ji/je:の音声変容を受けて、キヤとなったり、やわらげられて、カンとなったりする。「カエ」は「カイ」・「キヤ」に較べて、いくぶん待遇が高く、「カ」は「カエ」より、さらに高く譲歩的な効果を持つ。

1、ネゲンノ タツカトキヤ。(値段が高いのかよ。)
2、ホンナラ イッパイ ゴツツォニ ナリヤツシユカエ。(それなら一杯ごちそうになりましょうかね。)

3、キューワ イオツリー イクカン。(今日は魚釣りに行きますか。)(九)

(注)カンは当方言のうちでも、農家の多い、浅海寄りの地域の高年令層に多く用いられる。

〔カと他の助詞の重用〕

カは、やはり実際の発言の場での使用に不適当な乱暴さを持ち合わせている一方、相手の反応を強いるだけの効果を持ち合わせていない。そこで、実際の発話では、他の助詞の助けを借りて用いられることが多い。

イ、聞き手への待遇がからんで、多少とも発問事態を和らげる必要から、聞き手の同意を求める間投的な助詞ナー・ノー・ネーとともに用いられる。

ロ、発問事態の過不足のない行きつきを計る必要から、聞き手への接近・開発を計る助詞イ・エとともに用いられる。

イの線から、カノー・カナー・カネーがロの線から、カイ・カエ・が、イ・ロ二つの絡み合った線からカノイ・カナイなどが生じて、実際の疑問表現を形づくる。

カノイ・カナイ はともに、女性に多く用いられ、男性が用いるばあいは、相手が女・子供である場合が多い。女性のばあいは目上に対して用いられるばあいが多く、一種の「やさしみ」の効果を発揮する。

1、アスキー ミュッター ドコンヤマカノイ。(あそこに見えるのはどの山かしら。)

2、アリヤー ナンヂャッドカナイ。(あれは何だろうかしら。)

カノイ・カナイ は、ともに、カノン・カナン という、いつそうやわらかな語調を持つ形で用いられることもある。

主として、疑問表現の構成に加わる終助詞カ・ナ・ネ・ヤの中で、各年令層、男・女を通じて、もつとも、ふつうに用いられるのはカである。

1、ジェンナ アルカ。(カネはあるか?)

2、イロン クロカカ。(色は黒いか?)

3、ジーサンナ タツシヤカカ。(じいさんは達者か?)

4、ジーサンナ タツシヤカ。(じいさんは達者か?)

5、ヒデコワ ガクシェイカ。(秀子は学生か?)

動詞・形容詞・カ語尾形容動詞が述語となる文(1・2・3)では、終助詞カをそのまま添え、上りイントネーションを帯びさせればよい。しかし、チャル語尾形容動詞・コピュラ句が述語となる文では、語尾を除いて、4・5のように、形容動詞語幹や体言にそのままカを添え、上りイントネーションを帯同させなければならない。(九)

大分・転成文末詞・ン

ドコイ¹ツ²チ³ョ⁴ツ⁵タン。どこへ行ってたの。

シェン¹コ²ツ³ユ⁴ータン。そんなことを言ったの。

モド¹ツ²ツ³ョ⁴ツ⁵タン。帰っていたの。

この例文のように、「ン」は、問いかけに用いられる。中年以下それも若い女性に多い。親しみのある。上品な言いかたとされる。この「ン」は、格助詞「の」からの転成とみられる。(九)

鹿兒島・(奄美大島)・カ 共通語の疑問または反語の「か」に当る。ワガ シロカ(私がしようか)。タツカ スルカ(誰がするか)。この「カ」は「カイ」または「カヤー」の形をとることもある。ワガ シロ カイ(私がしようか)。タツカ スル カヤー(誰がするかね)。

「カイ」は、島の児童・生徒の「共通語」にも広く用いられている。例えば、先生 コレデ*キーカイ。*(「コレ」)……よい(コ)

鹿兒島・(岡兒ケ水)

ナ¹コ²ヤ³ー。ドイ⁴ヤ。何をかい。どれだい。

モ¹メ²ス³ク⁴ク⁵ヤ⁶ー。もう飯を食ったかい。

これらは、仲間同士または家族間で軽く問う表現で、品はあまりよくない。男子に多い。

ナ¹イ、オ²イ³ガ⁴ヤ。何、おれが(こわしたって)か。

この「ヤ」は、怒気を含んだものであるが、

ハ¹ガ²メ³イ イ⁴ツ⁵モ⁶ンヤ。慕参りに行きましようや。

のように、一方では、上品な勧誘表現をしたてることもある。

訴えの「ヤ」は、とりわけ、

アイ¹ガ イ²ン³ノ⁴テ⁵ヂ⁶ャ⁷ツ⁸デヤ。あれが十八番だからねえ。

のように、順接の条件を受けて立つことが多い。この種のもの言いは総じて下品である。(九)

鹿兒島・(岡兒ケ水)・ガ・ガー・カ・カー

通常、同等以下または家族間で用いる。

ダン¹ク²ヂ³ャ⁴ナ⁵ガ⁶ガ⁷ー。釘はないか。

これはごく単純な問いで、普通に、文末部に抑揚を伴わない。これに対して、

メ¹ス²ク³ク⁴ガ⁵ー。飯を食ったか、本当に?

のように、上げ調子の抑揚を伴うと、いぶかしがった質問となる。

ド¹イ²ガ³ホ⁴ン⁵メ⁶ナ⁷ツ⁸タイ⁹カ。どれが本当になるんだか。

のような独自の表現や依頼の表現では、文末で声の調子をぐ

つとおとしがちである。

ニユツケ|ゲ|ガ|イッ|カ。暑いのに誰が行くものか。

これは、強い反発の気持をこめた反語表現、

イモオ|クワン|カー。芋を食わないか、食おうや。

アヨ|コン|カ。早く来いよ。

これらは、一種の勧誘、命令の表現と見うるものになって
いる。

ア|ガ|ラン|カッ|ゲー。上れよ、さあさあ。

のように「カッゲー」ともなれば、命令し促す表現で、一段と
親密さがわいてくる。(九)

鹿兎島・(岡兎ヶ水) ガイ・ケー・ケ・ゲー・ゲ

モ|モドツ|テ|ヨ|ガ|ロ|ガイ。もう帰ってもよからうか。

「ガイ」は、疑問の「カ」をやらせた形であって、自己の
行為を決しかね、事の判断がつかかねる時に、自問的に発せら
れる。それに対し、「ケー」以下のものは、はっきりと相手に
問いかけていく姿勢のものを言ひをしたてる。さして下品には聞
こえない。

イ|ゲ|ラ|ゲ|。ツ|タ|カ|ゲツ|ケー。いくらかいな。二食分

かい。

コ|ン|タ|ナ|ユ|スイ|ケ。これは何をするの。(九)

鹿兎島・(岡兎ヶ水) コデー・コデ

ヒ|ヨツ|チュ|カル|オツ|タ|コデー。ひよいと背負っていた
じゃないか。

ハ|レ|バ|ヨ|ガ|コデ。それもそうよ。いいじゃないの。

「のに」の逆接機能を捨てて、文末の訴え性を備えたもので、
右のほか、

ト|イ|デ|アン|マン|コ|デ|ネ。おまえも一人前なのだか

ら)ひとりで歩くもんだよ、ね。(中年男→幼男)

のように打消法をうけて、当然の言いかたとしても用いら
れる。(九)

鹿兎島・(岡兎ヶ水) トゴイ

ク|イ|メ|ノ|スツ|ト|ゴ|イ。車にのせるの?(少女) ン、ノスツ

ト|ゴ|イ。ええ、のせるのよ。(同)

体言「ところ」からの転成で、問いかけ、応答表現をしたてる
ものとして頻用される。(九)

〔な〕

九州総括・ナ行文末詞

「暑イナ」などの「ナ」、および「ノ」「ネ」「ニ」などは、

「ナ行文末詞」と呼称される。呼びかけ性の強い、感声的な文

末詞で、九州にあっても、全域にわたって、対話の文末に立つての活動が著しい。いま、これを、敬意表現の観点からとらえてみよう。

上の諸事象のうちでは、全域にわたって、「ナ」が優勢である（肥前東部・天草・懐島に「ナイ」がある。）。

「ノ」は、北部から豊日地方へかけて、九州を北東部から包むような分布領域を示す。が、北部は、西へたどるほどに、勢力が弱まる。南部では、枕崎地方にのみ、一むら分布するにすぎない。全般に「ノ」は、「ナ」におされ、男性語として生きているのが実状である。

「ナ」の品位は、地域によって、かなり幅が認められるが、概して「ノ」よりも上位にある。ただ筑後や日向中部地方などでは、「ノ」の方が上位に位置している。

「ネ」も、ほぼ全域に分布する。ただ、中部以南においては、だいたい品位が低い。このことは、いわば、「ノ」などと共に、定着の歴史の古さを示しているよう。現下にあつては、これらの上に、新来の共通語の「ネ」が、上位の品位をもって、若い女性中心に、隆盛におもむこうとしている。

九州には、また、わずかながら「ニー」がある。薩摩・西彼杵・糸島半島などのそれは、すでに指摘されているとおりだが、

対馬にもまた、これが存する。特に、南部の豆蔵では、「アノニー。明日ニー。」などのようにあつて、注目される。（九）

福岡

ナ行文末詞は左表のように用いられている。ナシ・ノモはモシとの複合形、アンタナはそれらとはほぼ同等の敬意で、単独のナ行文末詞より品位は高い。ノモはヤ行文末詞との複合形で女性が主に用いる。ノモは旧立花藩領域、ノモヤは旧有馬藩領域に行なわれる。共通語から取入れたネーは一般に用いられるが、朝倉郡小石原村や嘉穂郡嘉穂町大隅の老男はネーより低いネーを昔から用いたという。あるいは地言葉のネーであろうか。（九）

筑後	筑前	豊前		
ノノ ーモ ヤーモ	ナナ ーシシ	ナ・ナー (アンタナ)	上	
ナイ	ネー	ナイ	中	
ニヤ		ノ	下	
ニヤは地点21とその近くの山地では同輩に用いるという。	地点14には畷カニーのようなニーがあつたが廃語となつている。	ノーは男性語であるが、筑前東北端から豊前北部には品位上のヨノがある。	注	

福岡・文末詞の丁寧表現〔老〕〔少〕

ナ、ノ、ネの三文末詞のうちでは、ナがほぼ全域に分布して
いて優勢。概して品位も高い。ネも全域にみられるが、中部以
南では品位が低い。ノは筑、豊、日にわたる北東部にある。

(九)

熊本、(深海) 禁止、解発、接近

終助詞ナ・イ・エなどが話し手の聞き手への働きかけの端的
な打ち出しを意味する禁止や解発の表現の構成に加わることが
ある。これらの終助詞にとって、概して共通な特徴は先行要素
が動詞表現にかけられていることである。

禁止の表現を構成する終助詞ナは当方言では、疑問の力のば
あいと同様に、間投助詞的なナ・ノ・ネと重用されるのが
常態である。ナ・ノ・ネとの結合の結果ノイ・ノン・ナイ・
ナンとの重用も許される。

- 1、イクナノイ。(行くなよ！)
- 2、スンナナン。(しないでね！)
- 3、ミンナナ。(見ないで下さい。)
- 4、クンナノ。(来るなよ！)

一般に男性では、4のナノの形をとり、女性では、1、の

ナノイの形をとり、男・女とも、目上に対しては、ふつう、3
のナナーの形をとる。

一方、終助詞ナが解発・接近の効果を持つ終助詞エと結合し
て、ナエの形で、禁止表現を作ることがある。

5、オンナエ。(居るなね！) (九)

熊本・(深海)

カノは、主として、老人層男・女に用いられ、待遇度は中
以下であり、カナは全年令層の男・女に、もつとも多く用い
られ、待遇度は中以上で、そのまま、目上に対して用いて差支
えはない。カネは老人層に用いられることがあり、共通語の
ものより、よほど待遇度は低い。

1、アチャー イソガシカチ ユーオツタバツテ キューワ
クルカノ。(あいつは忙しいと言っていたけれど、今
日は来るかなあ。)

2、ワリヤー タツシャカネ。(お前は違者か。)

3、ヘージロサン アンタ シバイ ミギヤー イツカナ。
(兵助郎さんあなたは芝居見に行きますか。)(九)

熊本・ソリヤ ソリデヨカッタテ。これは、「スグコイテ
|バイ」の「テ」とは意味が別である。

アシコユーテキカセトイタテナ。(あれだけ言ってきかせ

ておいたのになあ)であつて、形は同じでも「昨日戻ッタナ
ー」(昨日帰ったということですか)と全く別である。(ク)

鹿兒島・(岡兒ケ水) ナー・ナ

ハヨ カガヨゲ ナー。早くとりかかりましたねえ。

カゼ|ガ ナガ ナー。風が(吹か)ないですねえ。

「ナー」によつて、全体はよびかけ文となる。

ゲンキ アイヤツタ ナー。お元気でしたか。

この「ナー」は、一文を問いかけ文にする。「ナー」と「ナー」の抑揚の違いが、よびかけと問いかけとの機能の差を生みだす。

ハヨ イガン ナ。早く行きなさいよ。

これは勧奨のもの言いであるが、短呼の「ナ」は、当地でそれほど盛んであるとはいえない。

「ナー」「ナ」は、目下から目上へ、女子から男子へ多く用いられ、上品な文表現をしたてる。

「トヨナー」など複合形も多く、全年齢によくゆきわたっている。(九)

〔ね・ねえ〕

佐賀・(北山) 感声的文末詞・ナー

ヌッカ コター スッカ ナー。暑いことは暑いねえ。

「ナー」はこのように、単純な詠嘆の表出と呼びかけの機能をもつて立つ。全般に使用頻度は低い。(九)

佐賀・(北山) ナーイ・ナイ

ヌッカ ナーイ。暑いねえ。

チョット クモツトン ナイ。ちよつと曇つてるねえ。

このように「ナーイ・ナイ」は、「ナー」同様詠嘆表出、および呼びかけの機能が強い。ただ注目されるのは語尾の「イ」である。これは特定の待遇意識に応じて生じた、「音尾」だと解される。この「イ音尾」によつて、表現に柔らかみ加わる。全階層におこなわれるが、若い女性に少ない。ここには、対応して、普通「ネー」が立つ。(九)

佐賀・(北山) ナンタ

「ナンタ」は、「ナー・アナタ(アナンタ)」の、つづまって成立したものである。呼びかけの心意が、「ナー」のうえに、さらに「アナタ」をとらせたものである。

イマー ソヤン コター ナカバツテン ナンタ。今は

そんなことはないけれどねえ。

カラダノ ツヨカッタ トコチャロー ナンタ。体が強

かったわけだろうねえ。

このようにおこなわれる「ナンタ」は、「アナタ」を蔵してい

るだけに敬意も高い。「ナ^ナンタ」「ナ^ナンタ」など、声調も多彩である。使用頻度が高く、特に、中年層以上に多い。少年層などでは敬遠されがらで、当該個所には、前項の「ナイ」または「ネ」などが頻用される。

「北山方言」にあつては、上述の「ナ^ナンタ」の場合に限らず、一般に、文末部にあつて、「カ^カンタ」「ク^クサンタ」など、「アナ^アタ」を蔑しての呼びかけ表現が顯著で注目される。(九)

佐賀・(北山) ノー・ノーン

「ノー」は主として男性におこなわれるが、頻度は低い。

ワガ^ワ ヒトイデ^ヒ ニカイモ^ニ ノミヨン^ノ モン^モ ノー^ノ。 自

分一人で二回も飯んでいるものねえ。

なお、

キュー^クワ^ワ スツカ^ス ノーン^ノ。 今日暑いなねえ。

のような「ノーン」が、家族間などでおこなわれることもあるという。末尾の鼻音は、先にとりあげた「ナイ」の「イ」同様、一種の音尾とみてよい。これがあれば表現が柔らかくなり、親愛感の醸されるのが一般である。(九)

佐賀・(北山) カンタ

「ナ^ナンタ」同様、「カ^カ」に、呼びかけの「ア^アナ^ナタ」(ア^アン^ンカ)が結合して成立したものである。

ド^ドッ^ッカ^カツ^ツ キ^キタ^タ カ^カン^ンタ^タ。 どこから来たかね。

ソ^ソリ^リヤ^ヤー^ー ナ^ナイ^イ カ^カン^ンタ^タ。 それは何かね。

これも、呼びかけの「ア^アナ^ナタ」の効果が大きく、概して敬意度が高い。が、主として中年層以上のことばである。(九)

佐賀

文末助詞ナ・ノ・ネによる敬意度の差は認められない。これに準じる文末助詞ナイ・ニヤ^ニー^ーについていえばニヤ^ニー^ーの方がぞんざいである。例、ヨ^ヨカ^カツ^ツタ^タナイ^イ・ヨ^ヨカ^カツ^ツタ^タニヤ^ニー^ーよかつたね。よりていねいなノ^ノマイ^イ・ナ^ナタ^タの場合は、ナ^ナタ^タの方が敬意度が高い。例、ヨ^ヨカ^カツ^ツタ^タノ^ノマイ^イ・ヨ^ヨカ^カツ^ツタ^タ。しかしこれはナとノとの差ではなくて、後続成分たるオ^オマ^マエ^エ・ア^アナ^ナタ^タの差にもとづくのである。(九)

長崎・文末詞のナ、ノ、ネの品位の差は各地方で多少違っている。例えば、諫早ではナが目上、ノが同輩・目下、ネは目下に対して使われる。また諫早の場合、同じ文末詞として使うナ^ナタ^タ・ノ^ノマイ^イも、ナ^ナタ^タが目上、ノ^ノマイ^イが同輩・目下とはつきりしている。

長崎・バイネ 蔑みの意。馬鹿バイネ(馬鹿だね) エーバイネ(ええ何だい)(長方)

大分

文のていねい度を、対になった文末詞の使いわけで示すことがある。雨ジャナーは、雨ジャノーよりていねいである。県南方言の例でいうと、見タナー／見タカノ（問いかけ）、見タデ／見タド（主張）、見ローエ／見ローヤ（勧誘）等々、いずれも初めのほうがていねいな言いさまになる。玖珠では、ノカに対し、主に女性がノへを用いるが、ノへはていねいな、親しみをこめた問いかけになる。

県北の、西国東、宇佐、下毛、玖珠の地方では、タナー、ア
ンタナーという文末詞を多く用い、文体をていねい体にする。
たとえば、モ一 ヒトフリ スリヤ イ一、ア|ン|タ|ナー（もう
一降りすればよござんすね）。（九）

大分・（長瀬）感声的文末詞・ナ・ナー

「ナ」および「ノ」一派の、いわゆる「ナ行文末詞」がとり
あげられる。いずれも、呼びかけ、訴えかけの機能が顕著であ
る。

スズシ一 ナ。 涼しいね。

このように、「ナ」には、相手に呼びかけて、その、同意・共
鳴を期待しようとする、話し手の姿勢が認められる。

さて、このような、比較的単純な呼びかけの意図は、実は、
次のような、長呼の形でもってうちだされる場合が多い。

ア|テ|イ一 コツチャ ナ一。 暑いことだねえ。

ソ一|ジ|ャ ナ一。 そうだねえ。

長呼の音相に、よりつよい、話し手の詠嘆がよみとれる。この
種のもの使用頻度は、全階層にわたって、高い。

「ナ」は、以上のような機能を基本として、用法の分化を起
こしてもいる。

ナ|ン ナ。 何かね。

ナ|ニ|シ| ナ。 何の用かね。

このような、「問い」の表現をはじめ、「依頼」「勧誘」「勧奨」
などの表現をしたてる。

全般に、中以上の品位を示す。（九）

大分・コト

相手の、一般的客観的な認識を喚起し、共鳴を期すべく、強
調的なもちかけを果す文末詞である。

ショ一|一|チ|ュー|オ イツ|ショ一|グ|ス|ン|ジ|ャ|コト。 焼酎を

一升出すんでしよう、ね。

コゲ一| スリヤ イ一| コト。 こうすればいいんでし
ょうね。

これは後示、説明の表現だが、この話し手は、もちかけの内
容について、相手も、当然承知のこととの認識に立っている。

ペンキョー シュニヤー イカン コト。勉強しなくては
いけないだろう。

このたしなめにも、聞き手の常識に訴えようとの意図がひそ
む。

「コト」は、主として女性が用いる。時に優しさがにじみ出
もする。(九)

大分・(長瀧) ナエ・ナーエ・ナーエ

コリヤ タキモンチュー ナエ。これは、たきものとい
うねえ。

ウツクジー ナエ。美しいねえ。

モー ボンガ クルキー ナエ。もう盆が来るからね
え。

先述の「ナ」と、「エ」文末詞とが結合して成立した文末詞で
ある。呼びかけの機能の著しい点で、ほぼ、「ナ」のそれに類
似するが、同意・共鳴を期待する、話し手の、より積極的な姿
勢もくみとれる。

この文末詞は、中以上の品位を保ち、優しさと親しさとをみ
せる。おおむね、女性に用いられる。

キューワ ナニシー キタ ナエ。今日は何をしに来
たの。

この「ナーエ」のように、「エ」に、アクセントの山が移るか、
長呼されるかして、その存立きわだったものは、問いかけの表
現にみられやすい。(九)

大分・(長瀧) ナモシ

アトウイデス ナモシ。暑いですねえ。

このような「ナモシ」が、主として老人の間に、わずかなが
らおこなわれている。これが、人によっては、「ナーモシ」と、
「モシ」の孤立の意識がなくもない。が、時に、

ベトウデスケンド ナオシ。別ですけれどねえ。

のような「ナオシ」の聞かれることもある。よって、「モシ」
の、「ナ」との熟合の事態を認めることができよう。敬意が高
い。(九)

大分・(長瀧) ノ・ノー

「ナ」とほぼあい似た、単純呼びかけの機能をもって立つも
のに、「ノ」がある。

イマー アンマリ ヤラン ノ。今はあまりやらないね。

オナゴンゴタル ノ。女のようなね。

「ノ」は「ナ」に比して品位が低い。だいたい、同輩以下に
用いる。全階層におこなわれはするが、しぜん、男性に多い。
(九)

大分・(長崎)ノエ

コトバガ イー ノエ。ことばがいいねえ。

イワン ノエ。言わないねえ。

「ナ」系の「ナエ」に対応するもので、積極的な呼びかけに立つ。「ナエ」が女性ことばとすれば、これは、男性ことばとすることができようか。普通、同輩以下に用いる。(九)

大分・(長崎)ノイヤ

イカンカッタ ノイヤ。行かなかったねえ。シラン ノー

ヤ。知らないねえ。

この「ノイヤ」も、「ノエ」の機能に類似するが、それに比して、いっそう下品とされる。若い男性にみられやすい。

ついで、「ヤ」「エ」「ヨ」など、いわゆる「ヤ行文末詞」がとりあげられる。(九)

宮崎・たとえば、「早いですね」を、日向ではハエノー、諸県ではハエナと言う。この、それぞれの文末詞ノー、ナは、軽い敬意を表わし、同等以上に用いる。同等以下には、日向ではネー、諸県ではネを用いる。こうした使い分けは中年層以上では大体保持されている。(九)

熊本・モネ・モネロ

「モネ」は接続助詞から終助詞化したもの、「モネロ」は意

味の全くちがった終助詞である。前者は「ものを」または「ものに」の転で、「のに」にあたり、「モネロ」は「ものやら」である。「やら」は近世前期には九州方言では「イロ」に変化し、いろいろの話の中に残っている。

何某テロイウヒト……

ナイロカイロ(何やら彼やら)

ドロコロ(どうやらこうやら)

ドウシューロ(どうしようやら)

似て非なる「モネ」「モネロ」の如きもまた方言文法の厄介さを語るものである。

①ドケイトラスモネロ(何処に行っていることやら)

②アタシャシランモネ(私は知らないのに)

②は終助詞の機能をもつてきて居り、その点①と同じだが、意味は全然別である。②は「もの」だけの形でも用いられ、

チットン燃エンモン

大好物デスモン

準体助詞といわれる「と」(東京語の「の」にあたる)に「に」をつけた「とに」から転化した「テー」も右と同意になる。

ソリヤ ソリデヨカッター、

これは、「スゲ コイテ、バイ」の「テ」とは意味が別である。

アシコエテキカセトイタテナー。(あれだけ言つてきかせておいたのになあ)であつて形は同じでも「昨日戻ツタテナー」(昨日帰つたということですね)と全く別である。(ク)

熊本・(海)ヤ・ナ・ネ

終助詞ヤが疑問表現に用いられることがあるが、カにくらべると、目立って劣勢である。接続のしかたはカと全く同じであるが、待遇度は高い。

1、マツヤニ トマツテ オンナツシエントヤ。(松屋に泊つていらつしやらないのですか。)

2、ジーサンナ タツシヤカヤ。(じいさんは違者ですか?)
まれに、カと重用されて、カヤという形を生じるが、その他の終助詞との重用例はない。

3、ワリヤー イツカヤ。(お前は行くかね。)

(注) カヤは中浦地区に見出され、船津方面には少ない。

形容詞やカ語尾形容動詞に ヤ が付属する時、形容詞や形容動詞の語尾にーカイ の形を生じるが原型はーカル と推定される。

4、ナツアー スズシカイヤ。(夏は涼しいかね。)

5、コンター タツシヤカイヤ。(あなたは違者ですか?)

終助詞ナ・ネによる疑問表現の構成は当方言では、一般性がない。

1、シゴトバ スンナ。(仕事をするか?)

2、アッコン ミセン シナモンナ タツカネ。(あそこの

店の品物は高いか?)

3、ドケー イカスナ。(どこへ行かれますか?)

4、ウタワ ウマカネエ。(歌はうまいかね。)

終助詞 ナ・ネが用いられるばあい、ナはカナーなどにくらべて複雑な印象が強く、多くは3のような軽い尊敬表現に添えられるし、ネは解莞・接近の効果を持つ終助詞エと重用されて、4のように、ネエの形をとることが多い。

文末詞ナ・ノ・ネ

1 アータワ 行キナハツタカナ(目上に)

2 アタワ 行クトネ(親しい同輩・子供に)

3 スシャ(ワリヤ) 行クトヤ(主に男子相互のみ、朋輩に
ぞんざいという)

「ノ」は老年層間にごくまれに用いることがあり、待遇としてはナよりも少し下がる。なおス語法のアタワ(アンヒトワ)行カストダロカ)の言い方は待遇的には1・2の中間に相当す

る。(九)

鹿兒島・(岡兒ケ水) ニー

同等以下の者に対して、親しく同意を求める場合に用いられる。

チュウ ニュッカ ニー。今日は暑いなあ。

ムツ|ガ ニー。おもしろいねえ。

親密の「ニー」によつてしめくくられる文表は総じて卑態のもの言におちつく。

オツカン ニー。おかあさんたらねえ。

非難の相手(この例では母)には聞こえよがしに、むしろわたらの相手に同調を誘うように語りかける「ニー」で、慣れあいで第三者を非難する場合によく用いられる。(九)

鹿兒島・(岡兒ケ水) ネー・ネ

マ| ジョ|ゴ|ヂャ| ネー。まあ、いわば、じょうごだねえ。

このような訴えかけ性を本来の機能としてもつ「ネー」「ネ」は、主に年少の者へ、それもおとなから子供へ、やさしく命令したり、軽くたしなめたりするときによくあらわれる。

イッキ ケネ。すぐに来るんだよ。いいね。

総体に、中等品位のもの言におちつくが、

ワガテ| スツ| トヨ|ネー。自分でするわいいね。

のように、複合形の文末詞によつては、そこに反発的な気分が表われ、品位が落ちるようなことも少なくない。

以上のナ行文末詞は、文表現法上、特に待遇品位の決定に關与し、他文末詞との複合に際しては、必ず最後尾に位置し、文表現の統制機能のうえでもっとも重要な地位を占める。(九)

鹿兒島・(岡兒ケ水) ガ・ガー・ガ・ガー

ハヂュモツタ| ガ。はずんでいたね。

コメン| ニュ|ガ|チュ|モン| ガー。米糖と言いますよ。

これらは、接続助詞からの転成で、上のよびかけや告知の働きのほか、

ハメナ| イ|ガン| ガ。浜には行かないことにしよう。

イナ|ゴ| スイ| ガー。(貝がらで)手玉遊びをしようよ。

のごとき、とり決め、勧誘の表現機能ももつ。(九)

鹿兒島・(岡兒ケ水) コツ・コーツ・ココ

ン|ゲ、ミョ|ッカ| コツ。ヨガ| コ。ヨガ| コーツ。あら、

きれいだこと。いいわ。いいわねえ。

喜怒哀楽の情を表わすのに「こと」、次の「もの」から転成した文末ことばがある。

モン、モン

ガツ|チュ|イ| ゲラ|シカ| モン| 全く、かわいそうだわねえ。

カダ、ガダー

ワッゼーガ ニュッカ カダー。何と暑いわねえ。先の「コッ」にも似た文末詞で、年層を問わず盛んにおこなわれる。

(九)

鹿兒島、(岡兒ケ水) ミヤー、シヤ

ゲンヂヤ ナランチュガ ミヤー。 どうにもならないぞうですがねえ。

メス イマ クカダヂヤ ミヤ。 飯を今食うとこですよ。

伝聞・断定の言いかたを受けて立つ、このような動詞系ミヤイ(御覧なさい)の文末詞もおこなはれている。

転成の文末詞として、

オレモ ダー。 おれにも(くれよ)さあ。

のような、特に指示語系ドラ(どれ)のものも認められないことはない。が、これらは、なお問投詞的な機能を残してもいる。今は、文末詞化の傾向にあることを指摘するにとどめておく。

以上、単純な形のを主に、文末部をみてきたが、実は、文の末尾部分の多様で、微妙な表現味というものは、複合形文末詞からなる文末部によって、一層明確にうちだされる(しかし、多くの場合、複合形文末詞は、単純形文末詞がそれぞれの機能をもって一体化していることを思えば、ここに改めて、そ

の二々を説明する必要もないかと思う。(九)

鹿兒島・宮崎南部・ガ 格助詞的用法のほかに、文末に付いて意志、勧誘、詠嘆などをあらわす場合がある。ゲンキジャガ(元気だね)。(コ)

鹿兒島・宮崎南部・ナ・ネ 文末で詠嘆をあらわす。ナは敬体、ネは常体である。例、オモシテナ「面白いですね」。(コ)

鹿兒島・ナーはネよりも丁寧度がつよい。ナーは目上へ、ネーは同年輩、目下へ使うのが普通である。だからナーは丁寧表現に続く。(九)

[九]

九州総括・ト

単独に活用語に接した場合には多くU韻に転じ下に他の助詞の接する場合、即ち他の助詞と複合する際には概してその助詞に同化せられ、また相互に影響するというようなために種々に遷る。

ソッデヨカト〔熊本、saddle yokato 「それでよいのだ」〕

ワガドツカイキチヨッカ、アタヤ串木野ゴアスト〔鹿兒島 waga dokki kibutka ataya kulikino gosusto 「お前はどこ

から来ているか、私は串木野でございますよ」〕

足袋ハダシ、ホナ地震テ思ウタツ〔肥後狂句 honna dz

hina omotatsu〕「ほんとの地震と思ったのだ」

ソギャンデヨカッ〔熊本〕「そんなでよいよ」

ソギャンゴテシテヨカトカ(ヤ)〔熊本 sogian gote shie

yokataka〕「そんなでよいのか」

ソギャンデコテシテヨカテヤ〔熊本、そんな風にしてよい
とのことだよ〕

前の四例は単独にあらわれた「ト」であり、後の三例は疑問

助詞「か」、疑問詠嘆の助詞「ヤ」と複合した「ト」である。

この「と」助詞は詠歎の助詞「ヤ」「ヨ」「ユ」の転「イ」「エ」
等と複合する時、さらに種々に母音を転ずる。

イッキ、コイモ連レッコッチェ来タトヨ〔鹿児島 三三

koimo tsuret kiatoyo〕「すぐに、これも連れて来たのだ
よ」

イカンチユツ、エンジョオシタドンカラ、サイモイッガチ

ユツ連レツ来タトヨ〔鹿児島 ikantsu endyo shidon-

kara saino iggalut tsuret kiatoyo〕「行かぬというて遠慮を

したけれどもしやにひに連れて来たのだよ」

コラドシタメズラン コッコ オマヤ、イッ キャッタ

トオ〔鹿児島〕「これはなんと珍らしいことよ。おまえは何

時来ましたのだね」

飲ンセカスレバ ケンクッオ シカキヤットオ〔鹿児島

〕「飲みさえすれば喧嘩をしかけるのだよ」

右の諸例は指定助詞の原形「ト」に詠歎助詞「ヨ」「ユ」の

接したものである。この「ト」に「ヨ」の転声助詞「イ」「エ」

の接する時「ト」は「タ」「チ」「テ」に転ずる。(九方)

九州総括

A ソギャンコツ、シェンタツチャ、ヨカタイ〔熊本

sogian katsu tenaha yokatai〕「そんなことはしなくなつて

よいよ」

ホナコト ジャラニヤアテ〔佐賀 soe\soe\soe〕

イカニヤアテ〔熊本〕「いかねやならぬよ」

今日ゲケワ 降ッテクレテワランテエ〔肥後狂句、

nanatee〕「今日だけは降ってくれてはならぬよ」

イットッキツ オンミヤッタモンセチヨ〔鹿児島〕「時^{とき}起
きて見て下されてば」

これは「ト」が「チ」に母音転換して、それに「オ」詠歎助

詞の接したもので、下接の詠歎助詞が「イ」「エ」である場合そ

れに同化影響せられて「ト」か「タ」「チ」「テ」となり勝ちな

のはいうまでもないけれども、そういうものがなくて「ト」は

「ツ」「チ」と転ずるのである。

ゲッセ ジャランジー ヨシゴアンソチー〔鹿児島湯元
「恥ずかしがらないで よろしくごいませうよ」〕

Aの「タイ」は熊本県に最も盛んに使われる。ソウデスタイ、ヨカデスタイという風に話言葉には必ず活躍する助詞である。

指定の助詞「ト」に詠歎助詞「ヨ」の転「イ」（動詞の命令形、「受ケイ」〔起キイ〕「見イ」〔行クカイ〕九州肥筑方言の「バイ」など皆これである。接してトイとなり、このトイのトがイという開音（前母音、口を開く音）に同化せられて〔a〕という開口音に転換したのである。（トの母音〔O〕は合音である）、例証をあげておく、オドン（庵を）スカント（不好）ウツパキル（斬）ザエ（柳川方言河沙一撮）この「斬ルザエ」は明らかに「斬ルゾヨ」の転、「斬ルゾエ」の転じたものである。転じたという理由は「エ」という開音に同化したのである。なお、このザエは佐賀方面に用いられている由である。さらにこの同化現象の的確な例を示す。

ヨカキブンデ ヒンネドン シツチャイヤライ〔鹿児島
hinedon sikyayari 昼寝（でも）をしていられるよ〕

ハラ、モ、ブドーガ出チャライ〔鹿児島〕あら、もう、ぶどうが出ていられるよ〕

コンタ「此者は」イッショイ（に）居ット（人）デ川内ン
トジャライ（鹿児島で此の人は一諸に居る人で川内（地名）者でありますよ）

Bは「シチャイヤルヨ」sicyayano 〓 sicyayano のヨがイに転声したためにヤルがヤラと転じたもので次の例も同様である。

dekyano 〓 deforaideanyo 〓 dsanyo 〓 dsaraiこれらの諸例に徴してタイは源流トイであることは動かすことができないと思う。（九方）

九州総括・ヤ・ヨ

① 下ノ方カラ男ノ登ッテ来ゴザルケン、アタシヤ、恥カシカヤア（博多）

② モーマカリマッセンヤナア（博多）「もう負かりませんよ」

③ 今日ワ、博多カラ、名島イ遊ビイ行ッテカエルト ジャガ、随分 クタブレマシタヤナア（博多）「今日は博多から名島に遊びに行って帰るところであるが、ほんとにくたびれましたね」〔名島イ〕「遊ビイ」のイは〔ヨ〕の〔ヨ〕脱落したものの、九州一般に「に」助詞を「イ」という場合が少なくない。
④ 敬チャンヨイ ナンナ（博多）「敬ちゃんよ」「なんだ」

(5) ソータイ、ショーノナカケン、傘バサイテ顔バカクシテ
行コーエイ(博多①を受けたもの、「そうね、しょうがない
から、傘をさして顔をかくして行きましょうよ」)

アンチャン、鎖バ動カソーエ(博多、「兄ちゃん、鎖を動か
そうよ」(九方)

九州総括・バイ

詠歎「ワイ」に語原関係する女性的「バイ」系語尾はパッテ
ンと大体同域分布を有する筑紫言葉の看板となるが、意味は軽
くなって標準語尾「よ」くらいに当る。

元禄一七年(一七四〇)刊『男色哥書羽織』に出る筑前の大
尽が使っているが、これと同調する「タイ」系は男性的で意や
や強く(西国語尾「てや」と同系であろう)。一分派「ダイ」
とともに、もしこれを関東の東都風の同形語尾と同じ語感で受
取るならば九州人は迷惑であろう。九州も南部はもちろん東部
高豊、日向では聞かれぬものである。ただ飛地としてバイは
豊後玖珠郡(東北端以外の)大部分と日向東臼杵郡北半部と西
郷村そして西臼杵郡諸塚村にある。またタイとの併存飛地とし
ては豊後日田市一带と直入郡日丹、萩二か村とそして日向臼
杵郡大部分が挙げられる。バナ・パノという形も、クナ・クノ
とともに筑後北部(旧有馬藩領)などで用いられバン・タンお

よび疑問カンが筑後下流(旧立花藩領)で聞かれバナタ・バン
タはカナタ・カンタとともに佐賀県南半部(旧鍋島藩領)に入
っては著名標識となっているが、いずれも代名詞アナタ・アン
タが結合融合したものであつて敬意を含んでいる。(九コ)

九州総括・バイ・タイ

「アラー山バイ」「アラー山タイ」このようにおこなわれ
る文末詞「バイ」「タイ」は、主として肥筑地方におこなわれ
る。上述のとおり、共に体言にも直接して、指定助動詞に代わ
り得る程度の、指定の効果を示している。しかし、両文末詞の
機能に、微妙な差異の認められることは言うまでもない。「バ
イ」は、話し手の心情・判断の、一方的な訴えかけを基本とす
るのに対し、「タイ」は、聞き手あるいは一般を認容した判
断・意図の、客観的な措定を基本とする。つまり、「バイ」に
は、直接的な表出にかかわる、一種の自己主張性の認められる
のに対して、「タイ」には、判断の普遍化を旨とした、一種の
客観性が認められる。共に隆盛で、それぞれの異形も多い。

(九)

九州総括・反語バシ

〔老〕肥筑および隣接する日向東、薩摩北に分布。

〔少〕老年層の分布領域よりも、筑前西・日向で減少してい

る。(九)

九州総括・強調パシ

〔老〕筑前西・日向を結ぶ地帯以南に分布。

〔少〕肥筑が分布の主域で、日向・薩隅で減少している。(九)

九州総括・説得おしつけの「ガ」〔老〕〔少〕ほぼ全域にある。が、ネーはそれができない。ユゴサンシクナー(好うございましてね)とは言えるが、ユゴサンシクナーとは言えない。ただし都市の女性の共通語交りの方言談話で用いるネーは東京式なのであって、ナーと対立するのではない。ノーは枕崎でしか使わないがこれはナーに対立するもので同輩、目下を使う。(九)

〔よ〕

福岡・軽く感情を添える語

同意を求める場合もあるし、軽い感嘆等種々の意味を表わして行くものに、九州北部の「バイ・タイ・サイ」がある。南九州では「トー・ヨー」なるもので、九州方言の特質を構成する重要な要素として注目されなければならないものがある。

これが、福岡市の旧博多郡に於ては「ベイ・テイ」のような軽い訛りを発生させており、朝倉郡では「ヘゲンサイ」のよう

な「サイ」となり、筑後西南部では「バナ・パノ・タノ」などと同系統の「バン・タン・カン」のようなものを生んでいる。

これが肥前に入ると二人称の代名詞「アナタ」と複合して「バナタ・カナタ」、これが更に転じて「バンタ・カンタ」を創成して非常な特異性を発揮している。(フチ)

福岡・命令形につくヨ・ロ・イ

動詞の命令形につく「ヨ・ロ・イ」などを接尾語とみるか、活用の一部とみるかは諸説のある所であり、これの分布はすでに説いたが少し変わっているのは、糸島郡福吉村における「書イテロ・来テロ・持ッテロ」の形である、これは「居ロ・見ロ」などの「イ・ミ」の脱落したものかと考えられるが、単に「書ケ、来イ、持テ」とは異り、二様の言い方のせられているような所もある。(フチ)

佐賀・長崎・終助詞は地方色極めて濃厚である。しかも待遇関係や情意的意味にもついでいろいろに語形をかえ、それがまた地域ごとの特色を形成している。

「バイ」は「よ」に相当する助詞で、「バン」「バンダ」などになる。相手尊敬の「バンダ」を用いない東松浦地区では、「バイ」だけでも敬意を失することはない。ヨカバイ(いいよ)、ガッコバイ(学校だよ)

地域による変化が多く、佐賀県内でも、ヨカビヤ（有田付近）、ヨカボー（佐賀東部）、ヨカバナ（鳥栖田代地区）、ヨカバマイ、ヨカボマイ（伊万里など）などが用いられる。（コ）

佐賀・長崎・「ダイ」は推量意志表現にそえて「よ」に近い意味をあらわす。「ダン」「ダンダ」などに変わる。ヨカローグイ（いいだろうよ）。（コ）

佐賀・（北山）ヨ・ヨー・単純な告知の機能を示す。

オキランバ オクルイ ヨ。 起きないとおくれるよ。

このような「ヨ」は、概して中以上の品位を保っている。

「北山方言」では、このような短呼の「ヨ」より、以下のような長呼のものが注目される。

キゴザラン ヨー。 いらっしやらない。

ミンナ イウオラス ヨー。 みんなおっしやってるよ。

この例文に見られる「ヨー」のように、「ヨ」にアクセントの山があり、これから一気に言い下される、いわば特異な下降調のものは、特色がことに明らかである。

以上のような「ヨ」類は、だいたい女性におこなわれやすく、概して多彩な活動を示している。（九）

佐賀・（北山）エー・告知の機能が認められる。

カエランバ エー。 帰らないとねえ。

クローシテ ヨマレン エー。 暗くて読めないよ。

これも、第一例のように、「エー」と「エ」にアクセントの山のあるものが多い。主として少年層に、それも男子におこなわれやすいもので、品位も低い。「ヨー」が女性語であるのに対して、この「エー」は男性語という、相対応した位置に立つものとも観察される。つまり、男子の「コマツタ エー」には、女子の「コマツタ ヨー」が対応する。女子が「エー」を用いると、乱暴なことばづかいになると言う。（九）

佐賀・（北山）バイ・「バイ」は一人称代名詞「われ」の、転訛して成立したものとされる。

イヤ バイ。 いやよ。

トジエンナカッタ バイ。 淋しかったよ。

ドザン シューナカ バイ。 どうしようもないよ。

このように、「バイ」は、話し手個人の特異な判断を、一方的に表出し、訴えかけていく機能をになうところに、特質が認められる。いわば話し手中心の、一方的な自己表出を基本とするものである。

この「バイ」は全階層に活用されるが、若い女性などには、下品だとしてあまり用いられない。

「バンタ」は上の「バイ」に、「アナタ」（アంత）が結合す

ることによって成立したものである。

オモシロカック バンタ。おもしろかったよ。

「バイ」よりもいくらか上品である。主として中年層以上におこなわれ、使用頻度は高い。(九)

佐賀

文末助詞バイ・タイは全県下で用いる。きわめて日常的な助詞で、ポー・バンタのように待遇上で変化した語形を除けば、共通語的な会話の中でもしばしば現われる。共通語のヨに対応するもので体言にも用言にも接続する。地域的に変化が多く、敬意度にも差がある。

佐賀地区ではバイの変形にバン・ポー・バンタがあり、タイはタン・トー・チャー・タンタなどと変わる。バン・タンには親愛の語調がある。ポー・トー・チャーはぞんざいしない方、バンタ・タンタは敬意度が高い。

有田地区にはビヤノ、伊万里地区にはポマイ・バマイがある。ビヤノはバイに対応するものであり、ポマイ・バマイは古くはもっと使用地域も広がったらしい。

島橋地区ではバイ・タイの敬意度を高めたバナ・タナが用いられる。

東松浦地区にはバンタ・タンタを用いないから、バイ・タイ

だけでも相当の敬意を含むとされる。(九)

長崎・(対島)や、「こんや」「せんや」は目下に対して「米れよ」「せよ」の意。(ツ)

長崎・タイ・①断定 イテミタタイ、(行つて見たよ) ②決定 ソーイウコトニナットタイ、(そういうことになるのだ)。

③あきらめ、シカタナカタイ、(仕方がないじゃないか)(長方)

長崎・バノ ①断定 ヨカバノ(いいよ) ②決定 ワカランバノ(わからないよ)。(長方)

長崎・バイ——デス・デスバイ——デアリマス。面白かバ、イ・ヨカバイ・デケンバイ・忙シカバイ。(長方)

長崎・県下では対馬がジャを使う以外は、タイ・バイがよく使われる。嵯峨・神代、上五島、奈良尾はタイ・バイを使わない。また福江はジャを使う。(九)

大分・文末詞のバイは、日田、玖珠、下毛奥地に、タイは、主として日田地方で聞かれる。他の大部分の地域には、共に聞かれない。バイ・タイ併用の地域では、バイは軽い断定の気持ち、タイは、より強い断言に用いるようであるが、詳しいことはわかっていない。(九)

大分・宮崎北部・文のていねい度を、土師では文末部の助詞などの使いわけで示すことが多い。たとえば、見ナー…見ヨ

(命令)、見ナンナ…見ルナ(制止)、見ルナエ…見ルカエ
(問いかけ)、見クデ…見クド(主張)、見ローエ…見ローヤ
(勧誘)等々、いずれも前項が、よりていねいな言いぶりになる。ナーとノーも同じく、ナーがていねいである。(コ)

大分・(長湯) ヤ・ヤー

ハヨー イコー ヤ。早く行こうよ。ヨー ヨメ ヤー。よく読めよ。ナン ヤ。何かね。「ヤ」は、この例文のとおり、呼びかけの機能を基本として、「勧誘」「勧奨」「質問」などの表現をしたてる。男性の用いることが多く、概して下品である。

(九)

大分・(長湯) エ・エー

サンケイ ショー エ。参詣しようよ。オリチ アソビナ
ー エ。下りてお遊びよ。ゲレガ エ。誰がかね。ホント
ー エー。本当かね。

このように、「エ」も、「ヤ」と同じく、「勧誘」「勧奨」「質問」などの表現をしたてる。ただ、これは、「ヤ」と違って、中以上の品位をもち、女性によって用いられるのが普通のようなものである。土地人も、概しく、女らしいことばだと内省する。使用頻度は高い。長湯の方言表現を特色づける、文末詞の一つとして注目される。(九)

大分・(長湯) ヨ

アン シトガ クルチョーツク ヨ。あの人に来ると言
つてたよ。

コン ホン ウチンノ ヨ。この本は私のよ。

このように、「ヨ」は、いわば、告知の機能をもって立つ。比較的上品な、若い層中心の女性ことばとされる。

なお、次下のように用いられる「ヨ」を注意したい。

アッチー イキヨ。 向うへおいでよ。

オカシ ヤルキー ハイ キヨ。 おかしをやるから早く
おいでよ。

この「ヨ」は、文末特定要素としての機能に立ちながらも用法が固定的で、例えば「イキヨ」「キヨ」などのように、動詞の命令形の語尾として把握し得るものにもなっている。

命令表現をしたてるこの「ヨ」も、女性ことばとしてよい。上品で、概しみのある表現となる。(九)

大分・(長湯) ソ・ド

シラン ソ。知らないぞ。

コレゲケハッチャー ネー ド。これだけしかないぞ。

強調をこととした、ぞんざいな言いかたである。

グイ(サイ)

ソリヤー シラン ゲイ(ザイ)。 それは知らないよ。
ソリヤー シッチョル ゲイ(ザイ)。 それは知っているよ。

この「ゲイ」も、特殊な強調性を帯びた、ぞんざいな表現をしかたてる。主として老年層におこなわれるが、全般に、淡い。

「ゲイ」は「ザイ」とも実現する。

以上は、感声的な、いわば、本来的な文末詞である。(九)

大分・(長湯) ニー

シラン ニー。 知らないよ。

シェチャー ニー。 つらいよ。

アカラン ニー。 開かないよ。

「ニー」は、いくらか、自己主張的な面をみせる。「のに」起源であろう。「シェッカク タノーゲニー」(せっかく頼んだの)のように、「のに」的な意味作用をとどめたものも、まれにみあたるが、概して、その、接続助詞としての拘束から脱し、上述の機能をみせる文末特定要素として、安定していると言える。

若い層、それも、とくに、少年男女に多い。(九)

大分・(長湯) デ・デー

「デ」には、種々の用法が認められる。

アメガ フリデータ デー。 雨が降り出しましたよ。
オバサンガ ヨビョル デー。 おばさんが呼んでいますよ。

このように、ていねいな告知の機能をもっておこなわれる「デ」が、また、

チガウ デ。 違うよ。

のように、特殊な上がり調子を伴って自己の意志や判断をうらだし、時に、説明の構えをとりもする。

「デ」は、また、ていねいな問いの表現をしたてる。

ドシタン デー。 どうしましたの。

ドコ イクン デー。 どこへいらっしゃるので。

アクター シッチョル デー。 あなたはご存知なの。

この問いかけの「デー」は、だいたい、若い女性のものとしてよい。「デ」は、総体に品位がよいが、この問いかけの「デー」は、他の用法に立つものよりも、いっそう上品である。

「デ」は、また、次下のように、命令の表現をもしたてる。

アチャー イキ デー。 向うへおいでよ。

コン ホン ヨミ デー。 この本をお読みよ。

命令表現にかかわる「ヨ」があるが、これも、「イキ」「ヨミ」などの形を受けて立つのが普通である。この表現法もだいたい

女性のもので、とくに、若い層に多い。これを「親愛となげやり」ということばで説明する土地人もいる。「ヨ」に統轄された表現に比較すると、いくらか品位は下がる。

ちなみに、老年層では、「アツチー イカン デー」のような命令表現がおこなわれている。この表現の「デー」は、先の問いかけの機能をもっておこなわれるものに、類するともみられよう。上述の「マイキ デー」などの「デー」も、ここに、いくらかの関連を求めることができないのではないか。

なお、また、「デー」に関して、若い女性の間には、次下のような表現も成立している。

シンケン サカナ ツリヨ デー。 しつかり魚をお釣りよ。

オーキーノー ツッチ キヨ デー。 大きいのを釣っておいでよ。

コッチニ キヨ デー。 こちらにおいでよ。

これは、「ヨ」のかかわる命令文を、さらに、「デー」が統轄したものである。「デー」の、命令にかかわっての、もちかけ機能は著しい。

この表現法の成立は、比較的新しいかのようなのである。五十年配の一人は、少女時代、用いなかったと内省している。

「イヨ デー」の品位は、「イヨ」より劣るが、「デー」よりは、ややよい。

以上のとおり、「デ」の用法は多彩で、特色に富んでいる。が、強調性を帯びた告知、これが、「デ」の、本来の機能とみてよからう。(九)

大分・(長湯) ワイ・ワー

ナンカ ポツ Chol ワイ。 何か漏っているよ。

オナジジャ ワイ。 同じだよ。

イカン ワイ。 行かないよ。

このように、「ワイ」は、自己主張的な呼びかけを果たす。全階層におこなわれるようだが、なかでも、若い男性に多い。

スヨク ナルンジャ ワー。 すっぱくなるんだよ。

ウシガ オテコムンデス ワー。 牛が落ちこむんですよ。このような「ワー」も、「ワイ」と同様の機能をもって立つ。

ただ、「ワイ」に比べると、いくらか品位がよい。これも、全階層におこなわれる。

さて、上の「ワー」の調子は、総体に平板であるが、一方、次下のように、「ワ」にアクセントの山をおき、そこから、一気に言い下す点に特色を示すものがある。

ウチニ オツ Chol ワー。 うちにいるよ。

インマ イキヨッタ ワー。 今行つていたよ。
ユ一 ユ一チカント コマル ワー。 よく言つておかないと困るよ。

これは、だいたい、女性中心のことばのようである。少年男子などにも聞かれることがある。「ワー」という調子は、著しく耳をとらえる。

総じて、上の「われ」系一派の文末詞は盛んである。(九)

熊本

バイ・タイは全県に老少を通じて旺盛な勢力をもっている。両者の用法・性格は重なる部面があるとともに、互に通じては用いられ得ない面をも持っており、これを強いて区別すれば、タイは客観的・理性的判断の場合に用いられ、バイは強圧的・警告的とか、話相手に強く迫る気味をもっている点で相違する。バエは菅北郡・天草郡に用いられる。なお、バイタは本来の在郷語らしい泥くさを伴っているが、バイよりも敬意が高いといった本性は失っていない。遠慮のない問柄に用いられ、都会の少年層では、著しく劣勢になりつつある。バン・ポーは卑語的である。(九)

熊本・(深海)・情緒的断定

1、終助詞バイ・タイ・サイが体言や用言に付属して、助動

詞ジャ・シャルや終助詞ゾ・ヤ一・ヨ・デなどが作るそれとは趣を異にした断定的な表現の構成にあずかる。

ドンガメニ ニチャオルバイ。(どんがめ——虫の一種——に似てはいるよ。)

シナモンノ オロヨカザイ。(品物が悪いぞ。)

ワカリヤシクタイ。(判りましたよ。)

ヒデコワ ガクシエイジャツサイ。(秀子は学生だぞ。)

ハユ一イコーザン。(早く行こうぜ。)

ビエンバツカリ クフットデスパエ。(生魚ばかり食べるのですよ。)

イエエン オラストバナ。(家にいらつしやるのですよ。)

アンフター バカシャルパノ一。(あの人は馬鹿だよなあ。)

モー モドロタン。(もう帰るとしまししょう。)

ジーサンナ クツシャカター。(じいさんは違者だよ。)

クワンハ チューデスタナ一。(桑の葉と云うのですよ。)

2、サイは男性・老人層女性に用いられるに限られており、バイに比して、一般に荒々しい印象を持っている。少年層では、サイは常にサイとして用いられ、老人層でも、促音が先行する

ばあいはサイとならなければならぬ。サイは音声変容としてのザエ・ザンの形を持つが、ザンは、とりわけ、雑話に粗暴な印象をもたらす。サイの系列は間投的な助詞ナーと結合しない。

その点、タイ・バイのばあい、すべての年令層の男・女にふだんに用いられている。タイにはタン・ターの、バイには、バエ・バナの音声変容があるが、これらのうち、タン・バナに高い得遇が認められる。タイ・バイの系列が間投的な助詞ナー・ノーと重用される時、バイナー・タイナーはかならず、バナ・タナーと短呼される。その他の表現として次のようなものがある。

話し手の聞き手に対する反立的な感情を表現する表現の構成に、終助詞ガ及び、形式名詞から転じたモン・トなどが加わることもあるし、話し手の主情的な感動を伝える表現の構成に、間投的助詞ノー・ナー・ネーの他に、終助詞ワイ・マーなどが加わることがある。疑問表現や確述・念押し表現の構成に、形式名詞から転じたトが上・下イントネーションの帯同いかんで使い分けられることも、共通語におけるノとの対応という点で、語彙的に注目される。

イタクキタドガ。(行つて来ただろうが!)
アマクサヂャッタツチャ ナンデン アットヂャモンニ。

(天草だつても、何でもあるんだのに!)

コラストヂャモネ。(いらつしやるんだもんね!)

イカンチャ ヨカワイ。(行かなくてもいいわい!)

イタックワ。(行つて来ようわい!)

ハユー カカヂャマー。(早く書かなくてはなあ!)

コガシコ ヨカト。(これだけでいいの?)

コガシコ ヨカト。(これだけでいいの!) (九)

鹿兒島・宮崎南部・グイ、文末について余情を添える。ミン

ナゲンキジャイヤロダイ(皆お元気だろうよ)。(一〇)

鹿兒島・(岡兒ヶ水)・ヨ・ヨ

ソイガ ウイノ ハンメ ヨ。それが牛の飼料だよ。

「ヨ」「ヨー」は、このような告知をはじめとして、種々の意味機能をもつ。概して品は悪くないが、これも、たとえば、

ワイガ キタデ ヨー。きさまが来たからだぞ。

のごとく、条件法を受けて立つような時には、相手を責める気持があらわで、下品である。

「ヨ」「ヨー」文末詞については、先に、別辞に関して少しふれたが、その他、

イシク ヨー。まあ、きたない。

のような感声的な文表現に、また、

ソイ ヨ。ソイ ヨ。 そうだ、そうだ。

ハレバ ヨー。 そう言えば、そうだってねえ。

などの応答表現に、固定的に用いられる。「トヨ」「カヨ」「トガヨ」およびその長呼形など、複合形文末詞も多い。

ヤ行文末詞は、ナ行のものに比して、一段と土地人の生活の深さを感じしめるものである。(九)

鹿兒島・(岡兒ケ水)・オ・オー

ソイが キモン オ。ソラ。それが着物ですよ。ほら。

グラシカア オー。かわいそうじゃないの。

中老女子の間に、まれにきかれる。告知し、主張するなど、

先の「ヨ」に似るが、どんな場合にも上品さを失なわないのが持ち味である。(九)

鹿兒島・(岡兒ケ水)・ゲイ・ゲイイ・ゲー・ゲ・デー

ンゲ アガアガチャロ ゲイ。いや赤っほいだらうよ。

イゴ デー。行くだらうよ。

これら一類のものは、自己の判断をひかえめに相手に伝えようとするので、推量の言いかたを受けて立つのが常である。

(九)

鹿兒島・(岡兒ケ水)・ド・ドー

この意味機能の分野も広い。

モ トツガ キタド。 もう時間が来たよ。

このような軽い告知をはじめとして、自己の経験を述べ、考えを主張し、はては、

ウツコロイドー。 ぶち殺すぞ。

のような、脅迫的な言いかたまでこしらえる。

ハヨ イツドー。 早く行こうよ。

一方では、このように、誘いかけたり、

アツケ イツメドー。 あそこに行かないんだよ。

のように、年少の者に、やわらかく禁止したりもする。老年の、

特に男子は、

ハヨ イゴドー。 さっさと行くんだ。

のように、未来法をうけての、かなり峻しい口調の命令表現法としても使っている。(九)

鹿兒島・(岡兒ケ水)・ト・トー

アキアンサン、ドゲ イツ トー。 昭兒さんどこへ行く

の。(少女)

ヤマガエ イツ トー。 山川へ行くんだよ。(青男)

「ト」「トー」は、問いかけにも応答にも用いられ、このような対話がよく自然に聞かれる。複合形文末詞を用いての、

メサ クタ トガ。 飯は食ったかい。(中男)

ヤ、クケ トヨ。もちろん、食ったさ。(中男)

などよりは、かなり品位も高い。準体助詞の「ト」は、一方で、このように完全に訴えことばとして定着している。(九)

鹿兒島・(岡兒ケ水)・テ、テ・ト

オゲ マダ|パン| テー。おれはまだ食ってないんだよ。

キニユ キタ|ト。昨日来たんだよ(来たんだのに)。

自己主張的なもので、品はあまりよくない。「テ」「ト」の短呼形は、相手に言いかけるといふより、年長者の早合点、独断に対して不満そうにつぶやくもので、いくらか「のに」的な気分が残っている。(九)

鹿兒島・(岡兒ケ水)・カー・ガー

ニヨン カー。馬鹿めが。

ハラカッポヒ ガー。怒りんぼうめが。

格助詞からの転成文末詞として、「ノー」同様、総じて卑罵のもの言いをしてる。(九)

鹿兒島・(岡兒ケ水)・ノー

コメモン ノー。このこわっぱめが。

イッバガモン ノー。大馬鹿者めが。(九)

鹿兒島・(岡兒ケ水)・チュ・チ

ハヨ|セー|チュ。早くしろってば。

イッキ クッ|チ。すぐ来るってよ。

「チ」は、複合形の「チナ」「チオ」などととも、女性の、品のいいことばである。(九)

鹿兒島・(岡兒ケ水)・ワイ・ワー・ワ……イ・ワヤー

ヨガ|モー。ヨガ|ワイ。もういい。いいわよ。

ウツタド|ワ。ぼつぼつ準備しようか。

前のは強い拒否、後のは軽く自分を促す調子のものである。見出しの「…イ」は、

ユ|アス|バイ。よく遊ぶわい。

のように、述部の末尾音節と熟合した形であられるものであることを示す。

ノツ|ヂ|ガン|ナ|ワヤー。飲んで行かなくてはね。

中・老年男子のゆったりした気分の感じられるもので、「ワレは」からの転成である。(九)

鹿兒島・(岡兒ケ水)・モシ・モシ・モサー

モ|イ|ガン|モシ。もう行ってやらないようだ。

よびかけことばからの転成であろうか。子供らが、口を突き出すようにして、皮肉にまたからかいながら言うもので、これが成人間で用いられると、非常に下品なもの言いとなる。

エー|イ、モ|コ|イ|カ|ヤ|カ|ガン|モ|サー。えいくそ、これ

からは書いてやらないよう、だ。(九)

[九]

佐賀・長崎・ザイは「ぞ」に相当するものでジャーともなる。

ヨカザイは「いいぞ」の意。(三)

佐賀・(北山)・ジャー・ジャン

「ジャー」「ジャン」は「ざい」から転訛して成ったものと

推察される。「ざい」は、九州北部地方に、ひろく分布する文末詞であるが、「北山方言」では「ジャー」「ジャン」と転化して存立しているものようである。

イカージモ ヨカ| ジャー (行かなくてもいいぞ)

アナー| ホゲツ ジャー (穴をあけるぞ)

ヨカ| ジャン (いいぞ)

ヒルワ| スツカ| ジャン (昼は暑いぞ)

このようにおこなわれる。サイの機能に類似するが、それよりもいっそう強調性に富む。それだけに下品でもある。だいたいの男性のことばとされる。(九)

長崎・(対馬)・バイ

丁寧な語でない。アルバイ・アリンスパイ・デケンバイ・行

クバキ・行カンバイ・なお、デケンバイは、「いかんぞ」の意。

バナ―バイに同じ。何れも友人または下級の人に対していう。アルバナ。(ツ)

熊本・(深志)・確述・念押し

終助詞ゾ・ジャー・ヨ・デなどが体言や用言に添えられて、動作や性状の叙述に確定性を帯びさせて、確述・念押しの表現を構成する。固く、きっぱりとした声止めが加わるのが特徴である。

ロクロージヤマワ タツカヤマゾ。(六郎次山は高い山だぞ！)

キューワ ソラン ヤケテ ヒド― アツカジャー。(今

日は空が焼けて、ひどく赤いぞ！)

テンキン ヨカヨ。(天氣がいいよ！)

ヨケー イルレバ マタ クサルツデ。(余計に入れば、

また、腐れますよ！)

クロージヤマワ タツカヤマジャツゾ。(六郎次山は高い

山だぞ！)

チツゴガワワ オーキカカワジャツジャー。(筑後川は大

きな川だぞ！)

ロクロージヤマワ タツカヤマジャルヨ。(六郎次山は高

い山だよ！

チッゴガワワ オーキカカワチャッデナー。(筑後川は大
きな川ですよ！)

ゾ・チャー・ヨ・デのうち、ゾだけがチャル語尾形容動詞やコ
ピュラ句に付属する際、チャル語尾を排除するしないは随意で、
チャー・ヨ・デのばあいはチャル語尾を介さなければならぬ。
したがって、形容動詞語幹や体言に直接に付属するのは終助詞
ゾだけである。(九)

熊本・室町期の表現では、「ゾ」は、疑問表現と強調表現と
を有するが、熊本方言では疑問表現はなくなっている。(ク)

鹿児島・宮崎南部・ド

文末について言い定める気持をあらわす。オイモイッド(俺
も行くぞ)(コ)

〔さ〕

九州総括・クサ(老)

(少)筑前西、肥前東、それに肥後内に分布する。薩隅南端に
もいくらかある。(九)

福岡・バイ・タイ 分布域は筑前・筑後である。ともに告知

の文末詞であるが、バイには主情性が強く、タイには話者が理
の当然と確定したところを告知する語気がある。したがって、
タイは時に尊大な表現ともなり、相手の行為に対して、「アン
タが行クタイ。」と言えば、「行くことにするさ。(それが一番
いい)」という語気の命題ともなる。一方、自己の行為を告知
する時、タイは行クタイナーとナ行文末詞を併い得るが、バイ
ナーとは言わないのも、上述の性質のためか。バイナーは他者
の行為を推奨する時にのみ用いる。

豊前域のバイ相当の文末詞はワイである。筑前の東北端では
いくらかの違いをもってバイ・ワイが併用される。ワイには情
感の訴え性がより強く、バイには告知性がより強い。意志表現
に言イメーワナと言えば、主情の訴えであるが、言イメーバナ
は「お互いに言いますまい。」と相手をも誘いこむのである。
承接上では、バイは指定の助動詞めきで体言に続き、ワイは指
定の助動詞に続く。(九)

佐賀・(北山)・サイ・サー

ジョーズ|ジャ|ナカ|サイ。上手ではないさ。

クワシカ|コター|シラン|サイ。くわしいことは知ら
ないのさ。

「サイ」はこのように、話し手の心意の、強調的な表出にあず

かる。年令・性別にかかわらず頻用されている。次例のように、かなり自在な用法に立つものも観察される。

ヨイ サイ。これって言ってるのにさ、ほんとに。△呼びかけ▽

ホラー サイ。ほら、言わないことじゃあないよ、全く。のように感声的な叙述を、または、

キゴサイ サイ。おいでよ、ほんとに。

のように、いわば命令にかかわる叙述をまかまわず統轄し、強調的な訴えかけを果す。

この「サイ」の末尾音「イ」は、先に「ナイ」の項で検討した「イ音尾」とも受けとれよう。ここには、それだけの柔らげの効果が認められる。これに対して次例の「サー」は、比較的ぞんざいである。

オトコノ ナカニ ヒトリ イキウォッタテ サー。男

の中に入って、一人行ってたってさ。△学校▽（九）

佐賀・（北山）・タイ・ダイ

「タイ」もまた、特色ある文末詞である。この「タイ」には、「ト」の内在を認めることができる。

イカンチャー ヨカ タイ。行かなくてもいいさ。

ソコデ クシン シウォー ワケ タイ。そこで苦心し

ているわけさ。

ソギヤンデス タイ。そうですよ。

一般に、「タイ」は、表現内容に対する話し手の判断・意図を、客観的に拮定し、これに、ある普遍性を付与しようとする機能になうところに、特質が認められる。

上の「タイ」は、また「ター」「チャー」「タン」と転訛してもおこなわれる。前二者はぞんざいであるが、「タン」は、末尾の鼻音の効果で、いくらかの親しみをあらわす。

なお、「タイ」が、動詞の推量形を受けておこなわれる場合（すなわちウ・オ段長音を受ける場合）などは、「ダイ」と変容するのが普通である。

ユックラト シテ ヨカッタロー ダイ。ゆっくりしてよかつたろうさ。

「ダイ」のほかに「デー」「ダン」もある。

以上の「タイ」類は、全階層にわたってよく活用される。

（九）

佐賀・（北山）・クサンタ

「クサンタ」は「クサ」に呼びかけの「アナタ」（アンタ）が結合して成立したものである。

ソギヤン シトツテ ヨカ クサンタ。そうしていい

ですとも。

ソリヤ^リー チカウ クサ^ンタ。それは違いますとも。

「クサ」などよりは、いくらか上品になる。「ナンタ」「カンタ」同様、主として中年以上に使用される。(九)

佐賀・(北山)・タンタ

「タンタ」は、「タイ」に、「アナタ」(ア^ンタ)の結合して成立したものである。

エンリョ センテチャ ヨカ タンタ。遠慮しなくてもいいさ。

「アナタ」を蔵しているだけに、「タイ」よりも上品である。これも、だいたい中年以上によく活用される。(九)

佐賀・長崎・タイはター・タン・タンタ・タイエー・タイノ^ノなどになる。チャー・テー・タナを用いる地方もある。ヨカタイは「いいよ」とか「いいではないか」という程度の、認容放任の意味や自認の意味を表す。(コ)

佐賀・長崎・クサイはクサ・クサン・クサ^ンタなどに変化する。クシャ・クソ・クサナを用いる地方もある。認容放任の意味がタイよりも強く、ヨカクサは、「いいさ、かまわんよ」というような語気がある。(コ)

宮崎・バイ・タイ

バイは日向の北部一帯に広く用いられ、所によっては少年層まで使う。大体、念を押して言い聞かせる意で、「ぞ」よりは軽く「よ」に近い。目下にはあまり使わないようである。

タイは北部の中、西臼杵郡でのみ老・少共に用いる。大体、軽く言い放つ感じの「さ」にあたり目上にはあまり使わないようである。(九)

熊本・クサ

熊本語で強めのクサを使う場合、ソギャンコタ知ツトルクサ(もちろん知っているさ)のように相手につっかかるような強い断定の場合、しかも言い切りの表現に限られるようである。クサは文語の強めの係助詞コソに由来するものであるから、今の熊本語のような強調的断定性は、本来の性質をよく伝えていと思う。ただ、『菊地俗言考』(幕末)には、「それでクサ、ろくなことはあるまい」のように、言い切りでないクサの用例が出てくる。これは現在の福岡県方言のクサと共通で、こういうクサも当時はあったのであろう。(ヒゴ)